

歴史から見たラテンアメリカのかたちーその 12 :

ラテンアメリカのかたちをまとめると

渡邊利夫 *

【要旨】 まとめとなるこの論稿ではこのシリーズの主題である歴史が作ったラテンアメリカのかたちを概略史の中で説明する。付論で歴史が地理の影響を受けていることを述べる。

キーワード: テンアメリカのかたち、歴史と地理。

* ラテンアメリカ・カリブ研究所シニア・リサーチフェロー。1970 年に外務省入省、スペインを皮切りに米国やブラジルを含むラテンアメリカ各国で勤務後、2010 年から 12 年まで在ボリビア日本国大使。1986 年にジョンズ・ホプキンス高等国際問題大学院(SAIS)留学。退官後南山大学などで非常勤講師。現在は先行研究に照らして現地で見聞した知識を整理する仕事をしている。本稿で示された見解は著者個人のものであり、ラテンアメリカ協会の見解を反映するものではない。正確を期したが、誤りがあれば筆者の責に帰す。

はじめに

これまでシリーズものとして『歴史から見たラテンアメリカのかたち』を書いてきた。というのも、筆者にはある地域・国の政治・経済・社会や文化のかたちは歴史の中で形作られるもので、今のラテンアメリカを知るには歴史を振り返るのが一番の近道であると思っているからである。歴史はラテンアメリカのかたちを知るための覗き穴である。

カリブ海の西インド諸島の中にエスパニョーラ島があるが、この島を分ける旧スペイン領のドミニカ共和国と旧フランス領のハイチの運命が分岐し未だハイチが混乱しているのも、スペイン語圏とブラジルの国情が異なっているのも、歴史のなせる業である。また西半球にあるアメリカ合衆国が自由民主主義を堅持しているのに対し、ラテンアメリカでは政治のぶれが大きく、未だ民主主義の定着が課題となっているのも歴史を知らなくてはわからない。地域研究は歴史から入るのが王道である。その場合歴史をその地域・国の視点からだけでなく、是非国際政治から俯瞰的に見てほしいと思う。さすれば史実が客観的に評価できるばかりでなく、他の国・地域と比較することができる。

それでは締めくくりとなる本稿でこのシリーズのテーマである歴史が作ったラテンアメリカのかたちを述べるために、歴史を簡略に述べる中で<太字に>まとめてこの

長い旅路を終わりたい。最後に付論で地理も歴史を作っていることを述べる。

ラテンアメリカのかたち

「新大陸」は西欧文明圏に

ジェノバ出身の男コロンブスはスペインのカトリック両王の支援で 15 世紀末に東の海よりやってきた。ちょうどモスクワ大公国のイヴァン大帝(治 1462-05)がユーラシア大陸の東部を征服するためにロシア建国の途に登り始めていた頃である。後にヨーロッパ人がアメリカと呼ぶようになるこの大陸は未知の領域であった。そこにはユカタン半島を中心にマヤ文明、メキシコでアステカ文明、アンデスの高地にはインカ文明が花開いていた。先住民にとってコロンブスとの出会いは自らの運命を一遍させるものであった。コロンブスに続いた征服者コンキスタドーレスたちは先住民の安穏な生活と土着の文化を破壊した。その結果この大陸に先住民文化というウイスキーを西欧文明というミネラルウォーターで希釀した水割り文化が生まれた。このメスティソ文化は地域により先住民の文化の濃度が濃かったり、西欧文明の色が濃かったりしたもの、かれらがメソアメリカ文明の絵文書やインカ文明のキープを除き文字と呼べるようなものを持たず、また鉄器¹、火薬、車輪の使用など技術レベルが遅れていたためにヨーロッパ文化に隸属させられた(アダムソン 1979 p.43)。結果として「新大陸」

¹ 古代オリエントで前 19 世紀ころに成立したヒッタイト王国が最初に鉄器を作った。日本では古代中国で作られた鋳造鉄斧の破片を弥生時代の前一世期末から後一世紀に再加工したおの状の鉄器が奈良の唐古・鍵遺跡から出土している(2025 年 8 月 22 日付け日経)。そして弥生時代後期になると鉄製の農具が使われ、飛鳥、平安時代に日本刀が作られた。

はヨーロッパの文明圏に入った。

この頃のヨーロッパは、近世に神を中心のキリスト教の宗教観が支配的な中世から近世に移行する序曲の時代で、イタリアでは人間中心のルネサンスが興っていた。宗教界でも 11 世紀から修道院の活動が盛んになり、「新大陸」の布教でも活躍するドミニコ会、フランシスコ会などの托鉢修道会が生まれ、それは 16 世紀に中欧で始まる宗教改革に発展した。

イベリア半島では 8 世紀からイスラム支配に対するレコンキスタ運動が始まった。いち早くそれを終わらせたポルトガルは豚・羊肉の冬の貯蔵や味付けに必要な香辛料や奴隸を求めてアフリカ大陸西岸を南下しアジアへの航路を開いた。それに乗り遅れまいとスペインのカトリック両王は 1492 年にグラナダ王国を陥落させると、コロンブスを西の海に送った。こういう背景があってインディアスと呼ばれたアメリカの植民地化が始まった。

ポルトガルとスペインにとって「新大陸」は金のなる木であった。ブラジルで砂糖、後に金が出て、ボリビアとメキシコで銀が大量に産出した。カトリック教の布教はローマ教皇から委託された使命であった。スペイン語圏で征服を行ったのは、自分の力で運命を切り開けるというルネサンス的信念を持ったコンキスタドーレスやエンコメンデロ、ブラジルでは冒険心に富んだ砂糖農園主達であった(オランダ 1976 p.22)。そして先住民を征服し、富や後世に語り継がれる英雄物語とインディオを絶滅近くまで追い込んだ黒い伝説を遺した。

3世紀の間イベリア半島の国が支配

「新大陸」はヨーロッパ文明圏に入ったかもしれないが、植民地統治を行ったのはレコンキスタ運動を終えたばかりのスペインのカスティリヤとポルトガルであった。両国の支配は 3 世紀の長きに亘って続いた。他方で北米大陸については 17 世紀初めからプロテスタンントのイギリス人が植民を始めたので(フランス人はケベックに植民)、
アメリカ大陸で二つの宗教・文化圏が生まれた。英領では初めから植民者の法に基づく自治の意識が強かった。先住民のインディアンは駆逐された(亀井 2018)。

スペインとポルトガルはアメリカ大陸でイベリア半島の中央集権的な行政制度と文化を持ち込んだ。先住民(それにブラジルの黒人)は外国人・現地生まれのクリオーリョから成る支配階級に隸属するだけであった。統治は外国人による政治支配で、自由な植民者が自ら土地を耕した北米、交易や布教が主な目的であったアジアとは違った。**その文化は**レコンキスタ運動の過程で育まれた**中世の封建的な色彩が強かった**。スペイン人の目的は先住民を使って植民地の富、主に銀などの貴金属を本国に送ることであった。ブラジルの北東部やカリブ海では奴隸を使って砂糖生産が興った。アジアと違ってここにはヨーロッパ人が求めた香辛料がなかった。

宗主国がラテンアメリカに持ち込んだもう一つがレコンキスタ運動の延長である**カトリック教の布教**であった。16 世紀に中欧で宗教改革が始まったことから、「新大陸」の布教は対抗宗教改革の意味合いを持っていった。すでに中世の栄光を失っていたカトリック教の総本山ローマが「新大陸」で布教をするだけの資力が持ち合わせていなかった

ことから、その仕事はスペインとポルトガルの両王室にまかされた。できたのは聖職者も加わる政教一体の政治であった。宗教的迫害から逃れてプロテスタント中心の国を作った北米と異なり、ラテンアメリカは旧教との政教一致の社会となった。

また征服時にコンキスタドーレスによる大農園のエンコミエンダ方式の経済制度が始まったこと、王室による直接統治体制ができ上がるまでに時間を要したこと、イベリア半島より遠隔の地にあったこと、隸属する先住民(ブラジルでは黒人)の存在から、**その統治は北米の法治主義というよりもカウディリョを頂点とするパトロン・クライアント関係をベースとする属人的なもの**となつた。**法による統治は軽んじられた。**他方でスペイン・ポルトガル両国の長い植民地支配が続いたことで「新大陸」に一体感が醸成された。こうして独立の英雄ボリーバルが望んだ兄弟国から成る大家族主義と連帯感が生まれた。

ラテンアメリカの独立

キューバとプエルトリコ、そして幾つかのカリブ海の島嶼国を除くスペイン語圏の国はクリオーリョが中心になって 19 世紀初めに独立した(ハイチの場合はフランス革命の余波として黒人の反乱が原因)。国境線は植民地時代の行政区や地形に従って引かれた。そして**ヨーロッパ諸国によって国として認められ、ヨーロッパの公法秩序に中に入った。**独立のきっかけはナポレオンのイベリア半島侵攻であったが、その独立に至る前から知識人たちは啓蒙思想を学び、「気候、風土、生活様式、経済形態、あるいはさまざまな人種・民族との出会いなどが、時の経緯とともに、アメリカ大陸に住むスペイン人

に特定の精神的構造と心理」を共有し、彼らはアメリカの土地に愛着を持つようになっていた(エイサギルレ 1998 p.501)。アメリカ人としての意識が芽生えていたのである。その結果独立運動はスペイン領アメリカ全体の運動に発展した。もっとも兄弟にも個性があるように広大な大陸の異なる地理的条件から地方主義も育まれ、ナショナリズムも生まれた。

ラテンアメリカの独立は欧米の民主革命と同じ時期に起った革命でありながらその性格は異なっていた。旧大陸では啓蒙主義、産業革命によって経済力をつけたブルジョワジーが絶対王政を打倒して民主主義へ発展するという道を辿ったのに対し、ラテンアメリカではブルジョワジーが弱体でフランス革命で生まれたような民主主義が順調に育たなかった。**独立という名の新国家の誕生はクリオーリョが本国から派遣されてきていた「副王」を追い出し、政権を掌握するという政治運動であった。**ブラジルは独立のプロセスが少し異なった。ここではポルトガル王室がナポレオンの侵略から逃れてきて、その後本国に戻ったジョアン六世が再植民地にしようとしたためにその反発から独立に発展した。そこで独立後も共和制に移行するまでに一世紀近く帝政が続いた。しかし**独立によってスペイン領アメリカでもブラジルでも、封建的な植民地時代の体制が一掃されることはなかった。**現地の支配層(ブラジルでは王室)が宗主国の官僚に代わって統治した。それが今日でも植民地時代の旧弊を残す遠因になった。それは北米の独立との大きな違いである。

独立後に生まれた体制

ブラジルは独立後帝政となり混乱が比較的小さかったが、スペイン語圏では独立によって統治体制が崩壊し、戦乱で大きな被害を受けた。独立したものの、その後の政治運営は困難を極めた。統治に習熟した人材を欠き、何よりも独立後の国家像について保守・教会派と自由主義派との間で対立が続き、すぐさま国民的コンセンサスができなかった。権威の象徴としての王室は既になかった。その時に政治の舞台に躍り出てきたのが独立運動で活躍した軍人達、つまりラテンアメリカ文化の中で生まれたカウディリョであった。彼らは各地で財力を養い、親分子分の関係で一族郎党を養い、中央政界に進出することを虎視眈々と狙う頭領達であった。彼らの政治はフランス革命が編み出した民主・法治主義の原理に基づくものではなく、親分子分関係の力による支配であった。このカウディリョ主義が封建的文化に一番マッチしていた。19世紀に世界の覇権を握っていたイギリスはこの地域を「公式帝国」、すなわち植民地にする気はなく、資源が確保され自国産品の市場になれば良いという考えであったこと、西欧の文化圏に入っていたことで**世界が帝国主義の時代になってもヨーロッパの植民地化を免れた**。もっともラテンアメリカ諸国間で国境や資源を巡る戦争はあった。

ラテンアメリカ諸国がカウディリョの専横的政治を脱するのは、産業革命を遂げた欧米の向に資源・食料輸出が伸び、国内で寡頭支配層が誕生する 1870 年代に入ってからである。イギリスの唱える自由貿易主義に呼応して、富を蓄積したオリガルキーが政治の中心に座り、文民政治が始まった。それでも**カウディリョ主義の気風が消えること**

はなかった。この寡頭支配層はインフラの整備を始め、近代的な国家を作ることに精を出した。時代がそれを求め、輸出で得た財力がそれを可能にした。もっともこの国際経済体制によって**ラテンアメリカはモノカルチャー型経済になった**。また**貧富の格差などを温存した**。寡頭支配層は制限選挙を行い、貧しい一般国民のことは忘れていた。

20世紀は「米国の世紀」

19世紀までのラテンアメリカの国際関係はヨーロッパと米州という東西軸の中で発展した。ところが 20 世紀に入る頃より工業を発展させ経済力をつけた米国が西半球で唯一の大國になり、米州の国際関係は東西軸から南北軸に転換する。

世界は弱肉強食の帝国主義の時代であった。米国にはもはや西部のフロンティアはなく、市場を見つけるには海外に出て行くより仕方がなかった。米国とラテンアメリカ間の国力の差は歴然としていた。当初はヨーロッパへの輸出で富を蓄えた南米を中心独自の道を歩む気概を見せた国もあったが、次第に米国に従属させられた。特に米国から近距離にありカウディリョ支配が続々債務問題などにより政情が安定しない環カリブ海諸国は安全保障や政治の安定を理由に米国のあからさまな干渉を受けた。この時期に**環カリブ海地域が米国の裏庭になった**。

ここにキューバの独立の英雄ホセ・マルティが恐れた米国による支配と犠牲となる国の相克という**20世紀の西半球の国際政治の構図が生まれた**。それでもヨーロッパとの経済関係が強かった南米では大国が多く、戦前はまだ独立心が旺盛であった。多数の

ヨーロッパ系新移民が移住し工業が発展したことから、ひ弱ながらも民衆が政治に登場するようになった。彼等は富の配分を要求したことから政治が流動化し**ポピュリズム運動が起こった。**

戦後のラテンアメリカ

第二次世界大戦に向けて国際情勢がきな臭くなると、ルーズベルト米大統領は枢軸国と闘うためにユニラテラルな軍事干渉を放棄し米州との親善・連帯、すなわち「善隣外交」を唱えて友好ムードが高まった。その政策が第二次世界戦争の安全保障体制の構築を助ける。ところが戦後に冷戦が始まると、米国としてはソ連からの干渉に備える必要が出てきた。両大洋の天然の防壁に守られたアメリカ大陸が域外からの侵略を受ける可能性は小さかったものの、米国としては域内で左翼勢力が跳梁することを心配した。そこで米州諸国は米国の主導で**集団安全保障体制として「米州機構」を創設した。**米国の懸念が現実のものとなったのが

「キューバ革命」である。

1960 年代に「キューバ革命」に触発された各国の若者達は農村でゲリラ活動を始め、米帝国主義と寡頭支配体制に果敢に挑戦した。この左翼活動は 1967 年にボリビアでチェ・ゲバラが米 CIA に助力を得た軍により殺害されると、活動は都市部に移った。ケネディは「進歩のための同盟」を提唱し、左翼活動が生まれるラテンアメリカ社会の安定化に乗り出しが、結局**治安回復に役立ったのは軍政であった。**議会と国民の声を無視する軍政はアルゼンチン、チリなどでひどい人権侵害事件を起こしながらも、力の行使によって左翼を抑え込んだ。その軍政も左翼の一

掃には成果を収めるが、輸入代替型経済政策の行き詰まりから経済情勢の悪化によって足をすくわれた。

中米紛争

1980 年代にラテンアメリカでは民政化が進むが、中米は別で「解放の神学」で意識化した人々の支援を受けた左翼ゲラリが跳梁した。彼らにとってゲリラ活動は民主主義と国内改革を目指す聖戦であった。それに危機感を抱いたレーガン米政権は新保守主義の立場からこれを域外勢力にそそのかされた活動であるとして巨額の金を注ぎ込みゲリラの撲滅に躍起となった。米国が紛争の当事者であったことから、「米州機構」に問題解決を頼まなかった。そのためコンタドーラ・グループやエスキプラス II などの域内の和平努力が始まり、それが功を奏して和平が達成された。そのことは機構の存在感を薄める端緒になった。中米紛争が終わるとラテンアメリカはポスト冷戦期に入った。

軍政が終わる 1980 年代からラテンアメリカでは、累積対外債務危機を契機に国内産業の育成と輸入代替化政策から**「新自由主義経済」政策への転換**が始まった。メキシコでは長い「制度的革命党」体制が崩壊していく。すると米州の政治の焦点は民主主義の定着・深化と地域統合による発展に移った。もはや冷戦は西半球の国際関係をまとめる座標軸ではなくなった。

ポスト冷戦期に左右に揺れるラテンアメリカ政治

ところが 21 世紀初頭になると米国の相対的力が弱まり、中国の爆買いによる資源・

食料品価格の高騰で経済が潤い、ラテンアメリカ諸国は政治的発言力を高めた。また米国の関心は安全保障上の脅威がなくなつたことから中東など他の地域に移った。それは**新左翼主義の台頭**を許すことになった。その背景に「新自由主義経済」によって貧富の格差の拡大が切実な課題になっていたことがあった。ベネズエラ、ボリビア、ニカラグアなどの急進派の左翼政権は反米姿勢を鮮明にして米国との溝を深めた。キューバの社会主義は健在であった。また**中国が経済発展のための資源・食料と市場を求め**てこれらの左翼政権を足がかりに**この地域へ浸透した**。しかし2014年頃から資源価格の高騰という神風が止むと、各国の経済成長が止まりばらまき型のポピュリズム政策は行き詰まりを見せ、新左翼主義は停滞した。また資源価格の下落による経済の悪化は各国で騒動も惹起した。各国で政治と国

際関係の新たな軸はまだラテンアメリカに生まれておらず、**政治が左右に揺れる状況が続いている。**

まとめ—ラテンアメリカのかたち

これまでラテンアメリカ史を簡潔にレビューする中で、この地域の政治・経済・社会が先住民文化の影響を受けているものの、スペイン・ポルトガルの植民地期の封建主義、ペルソナリズムの気風、カトリック教の文化の尾を引きずっていること、19世紀初めに独立してもそれは大きく変わらなかつたこと、20世紀になるとアメリカ合衆国を中心に展開する国際関係の中でラテンアメリカが翻弄されたことを述べてきた。この地域で未だ民主主義的でない部分が多く残り、民主主義の定着が容易でなく、古い社会構造から政治が左右にぶれるのも歴史に答えがある。

付論

地理と歴史

地理は歴史の舞台

ここで歴史と地理の関係というテーマについて書く。地理学は場所(地域)と自然事象、そこで展開される政治・経済・社会などが織りなす人文・社会現象を対象とする科学、学問である。地理は歴史の舞台ともいえるもので、地理的条件が人種・民族集団に影響を与えていたことを考えれば、人の営みに着目し地誌学を発展させたのは自然のことである。

歴史を知るために地理を学ぶのは王道である(注)。アラン・ベイカーも「多くの歴史

学者は、場所を受動的な舞台とみなしてきたが、その一方で、歴史を完全に理解するためには、場所の知識が欠かせないことをますます認識する」ようになったと述べている(ベイカー 2009 p.287)。とは言え地理と歴史は人の営みの中で別の座標軸であり、何人もこの時間軸と空間軸を越えることはできない。

(注) 外交官は仕事の都合であちこちの国に赴任するが、着任するとまずその国の地理と歴史の本を読むことから始める。そして人々と大いに話し国情を知る。政治や経済などは新聞を毎日読むので自ずとわかる。

地理がラテンアメリカ史に与えた影響

ラテンアメリカの地理的多様性については「その 1」で説明した。その大きな特徴は地図を見ただけではわからない広大さ、大陸性にある。羽田から太平洋の上空を飛んでロスアンゼルスに行くより、ロスからブエノスアイレスに行く方がはるかに遠い。そのことを念頭に地理が歴史に与えた影響について具体的に見てみよう。

[コロンブスは地理を味方に「新大陸」に到達] 「新大陸」はコロンブスがアメリカ大陸に到達することによって世界史の舞台に登場した。太古の昔から物理的に大陸はあったものの、世界史に登場するのは地理上の「発見」によってである。当時は船が最も移動し易い交通の手段で、コロンブスは3 隻の帆船でカナリア諸島を出て赤道近くで西に向かう貿易風と高緯度で東に向かう偏西風の影響で北大西洋を時計回りに大循環する潮流に乗って未知の大陸に到達し帰還した。現在よりはるかに地理的条件が人々の活動に影響を与えていた時代のこととで、コロンブスはその地理的条件や気象をうまく利用した。

[多様な自然とそこに生まれた生活] イベリア半島人が来る前の「新大陸」には、先住民がさまざまな人口密度で社会を作っていた。赤道はエクアドルの首都キト近郊、北回帰線はメキシコ市の北、南回帰線はブラジルのサンパウロの近くを走っている。熱帯地域が広いにもかかわらず高度のおかげで南米はコスタ(海岸部)、シエラ(アンデス山脈の山間部)、セルバ(アマゾン河流域へと広がる熱帯雨林地域)の気候帶に恵まれている。先住民社会は水平というよりも

垂直的に発展し、大きな町は温暖な気候の高地にできた。また高度のある町は一日の寒暖差が大きく四季があると言われる程多様な生態系を持った。後にやってきたスペイン人の生活も基本的に先住民社会の上につくられたことから、論理的にはラテンアメリカの地理と風土に規定されて発展したことになる(山田 2000 p.209)。

[大西洋は天然の防壁] ラテンアメリカは大航海時代以来 3 世紀に亘りカリブ海の一部の島嶼国を除きスペインとポルトガルの文化や宗教を持ち、同じような歴史の軌跡を辿った。その結果お互いが価値観を共有し同胞意識を持つという世界的にも稀な地域となった。イスラム文化圏の宗教紛争やアフリカの民族紛争を見れば、いかに人種的・宗教的争いが少ない地域であるかがわかる。

このような道を歩むことができたのも、ワシントン米大統領が「告別の辞」で述べたように、地政学的に旧大陸から遠く隔たり、大西洋、太平洋という天然の防壁によって護られてきたからである。この恵まれた条件からラテンアメリカの人々は旧大陸の激しい争乱に巻き込まれずに平和な歴史を享受することができた。国境が植民地時代の行政区画の境界線上に引かれたことで明確でなかったことや資源を争って紛争は起きたが、本当に悲惨な世界大戦の戦場とならなかつた。

[自然災害の負荷が小さい地域] アメリカ大陸は西海岸で地震や火山噴火、カリブ海でハリケーンなど自然災害はあるものの、概して自然の禍の負荷の小さな地域である。大きな国が多く、人口の割に土地が広く資源や食料が豊かである。そのことで先

進国ほど豊かではないが、人々に安定した生活を約束し、時間に追い捲られる毎日の生活よりも“Hasta Mañana(明日があるさ)”という生活を楽しむ精神的余裕を与えていく。

[ブラジル東北部とカリブ海世界の類似] 植民地時代、「新大陸」からの重要な輸出產品は銀と並んでヨーロッパで需要が高まった砂糖であった。その生産の中心地はポルトガル人が最初に植民し土地・太陽・気候に恵まれたブラジル北東部とヨーロッパ列強が争奪戦を展開したカリブ海の島であった。労働者としてアフリカ系黒人奴隸が輸入された。アフリカが大西洋の対岸に位置し海路で結ばれていたからである。その結果この地域にアフリカ文化が持ち込まれ、アフロ・アフリカという人種的文化的特性が生まれた。この特性は宗主国も歴史も異なりながらブラジル東北部とカリブ海地域で見られる。両地域が同じような特性を持ったのは砂糖生産に向いていた気候と労働力を黒人奴隸に依存したからである。ここにも地理が社会の形成に大きな影響を与えた例を見ることができる。

[パナマ地峡は交通の要路] パナマは地形的に中米地峡の最も幅狭なところに位置している。歴史的に東西両洋の通廊であり、植民地時代に帆船がスペインから工業製品、ペルーの貴金属を運んだ。パナマはスペインとペルー副王領との交易の結節点であった。インカ帝国を征服したフランシスコ・ピサロもここから出発した。南米の解放者ボリーバルはヨーロッパ、アメリカ合衆国、ラテンアメリカ諸国から代表者を招いて「パナマ会議」を開催した。20世紀に入って貨物の大量輸送が重要になると、米国

はパナマをコロンビアから独立させ保護国にし、運河を建設した。またニカラグアがもう一つの運河建設の候補地であったことから、米国はこの国に特別な関心を持ち、20世紀に様々な干渉をする。これなども中米という地理的位置と地峡であったということを抜きにしては語れない。

[地理的制約による開発戦略の違い]

スペインとポルトガルが植民地経営に乗り出した時アクセスが容易な環カリブ海地域、大西洋と太平洋の沿岸部から開発を始めた。南米大陸のアンデス山脈は急峻な地形からその開発が遅れた。それでも銀が見つかることや開発に必要な先住民の労働力が豊富にあったことで、植民者はそこを活動の場とした。山岳部で生産される銀は輸送コストが高い時代にあっても腐敗せず少量でも値の張ることから長距離の輸送に適した。ブラジルでは大西洋の対岸にあるアフリカから輸入した黒人奴隸を使ってアクセスの容易な東北部で砂糖が作られた。豊穣で広大な土地に恵まれたアルゼンチンのラ・プラタ河地域で牛肉が生産され本格的にヨーロッパに輸出されるようになったのは、冷凍船ができて遠方というデメリットが克服されてからであった。

[大きな国になったブラジル] ブラジルの入植者達は「トルデシリヤス条約」に縛られることなく、実効支配が領有を決めるとの考えから、沿岸部で町の建設を始めて徐々に国境「フロンティラ・モーヴェル」を内陸部に広げていった。ミナス・ジェライス州で金が発見されると内陸部の開発が一層進んだ。その結果ブラジルは18世紀までに南米の半分近くを占める広大な領土になった。

これに対しスペインの方は、銀がアンデス山脈で見つかったことから、そこで生活圏を作った。アンデス山脈の峻厳な地形が自然の障壁となってその東部のアマゾンで植民地の開発に乗り出さず、そこで自然にスペイン領アメリカとブラジルの国境線が引かれた。

スペイン領は地理的に南北に大きく伸びる形で発展し、独立後は北半球から南半球まで域内の多様性から複数の国になった。険しい山脈という天然の国境がなく、ポルトガルとスペインの両国が直接角を突き合わせることになったラ・プラタ地域では、絶え間のない国境と領土紛争が発生し、緩衝地帯としてウルグアイという国が誕生した。

[地理が決めた国境線] スペイン領アメリカの場合本国との独立戦争を経て「現有状態維持の原則」に従って、植民地時代の行政区画がベースになって国境線が決まった。国境線は地理、すなわち大河や山脈など自然の境界の上に引かれた。当時のラテンアメリカを回遊したファンボルトも「領土の分割が起こりうるのは、自然境界を無視して相互の連絡もおぼつかない地方を恣意的に統一してしまった場合に限られる」と言って自然境界の重要性を指摘している(ファンボルト 2001 p.391)。アンデス山脈がもっと東にあったならばチリはあのような幅が狭く細長い国にはならなかつたかもしれない。

地形によって交流が容易でなく国民としてのアイデンティティを作ることができず、独立後複数の国に分裂することも起こった。「中米連邦共和国」や「グランコロンビア」である。

[広大な国土から資源・食料生産の宝庫

に】 産業革命が始まるとこの地域はヨーロッパ向けの原材料の供給地・市場になった。それは広大な国土に比べて人口が少なく、ラテンアメリカの太宗の国が資源・エネルギー・食料の生産に優位性を持っていたからである。アメリカ合衆国は地理的にヨーロッパに近いことから広範な商品を生産し輸出することが可能という好条件に恵まれた。ラテンアメリカはその点不利であった。

今日に至るもラテンアメリカの太宗の国が発展途上・中進国の地位に甘んじ、第一次産品を輸出することで生活の糧を得ており、それが経済発展の大きなネックになっている。資源・エネルギー・食料の豊かさがあだになったわけであるが、のことなども資源の賦存状況、すなわち地理的条件がラテンアメリカの経済に影響を与えた証である。もちろんそれがすべての原因ではないが。

[米帝国主義と地理] 20世紀にラテンアメリカは米国の「モンロー主義」の下に置かれ幾多の軍事干渉を受けた。その程度は米国に近いメキシコや環カリブ諸国と南米では大きな違いがあった。南米の国は比較的に良く独立を維持した。1876年からメキシコの独裁者であったポルフィリオ・ディアス大統領が、「おお、哀れなメキシコよ、お前はなんと神の国から遠く、なんと北米(アメリカ)から近いことか!」と嘆いた。これはメキシコが米国との戦争によって国土の半分以上を奪われたことを嘆いた言葉である(石井 2013 p.219)。また環カリブ海諸国が米国から安全保障上死活的に重要な地域と見なされ、20世紀に度々米帝国主義の侵略を受けたのも地政学的に説明が可能であろう。

参考文献

日本語文献

- アダムソン, デイヴィッド 沢崎和子訳 『マヤ文明』、文化放送出版部 1979 年。
- 石井章 『多面体のメキシコ 1960 年代~2000 年代』、明文書房 2013 年。
- エイサギルレ, ハイメ 山本雅俊訳 『チリの歴史』、新評論 1998 年。
- オランダ, セルジオ・ブルケ・デ クレスポ, マウリシオ訳 『ブラジル人とは何か』、新世界社 1976 年。
- 亀井俊介 『アメリカ文化年表』、南雲堂 2018 年。
- フンブルト, アレクサンダー・フォン 大野英二郎・荒木善太訳 『新大陸赤道地方紀行 上』、岩波書店 2001 年。
- ベイカー, アラン 金田章裕監訳 『地理学と歴史学一分断への架け橋』、原書房 2009 年。
- 山田睦男 『概説ブラジル史』、有斐閣選書 2000 年。